

二期8年を振り返っての今 我々はどこに行くのか



『我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行こうとしているのか』
ゴーギヤンはこの大作を描きながら何を考えたのだろうか。

◆議員と職員のための合併

2003年、当時進んでいた合併論議は、住民のためではなく為政者や議員たちの保身と利益のためのものでした。義憤から立候補し、真正面から「半島は一つ」を訴えました。

政治とカネに代表される旧来型政治選挙をひっくり返した楠旋風を追い風に、「何かが変わる」期待の大量得票を得て、松坂は議席を与えていただきました。

◆悪戦苦闘：期待に応えられなかった一期目

制度や条例の成り立ちを徹底的に勉強し、毎回質問に立ち、ムダや不正を質しました。しかし市議会は想像以上に機能しておらず、改めようにも、利権とメンツに終始する総与党議会が立ちはだかりました。松坂が立証した不正会計さえもお構いなしの議会でした。

松坂一期目の実績の一つ、旅費の過払いは正も、出張副収入が減った議員・職員のヒンシュクを買い、議員定数削減を訴える松坂は悪評を立てられました。眠りこけた議会に活を入れ議会を可視化し、行政の無駄も多く明らかにしましたが改善に至りませんでした。

◆島鉄南線存続に賭けた二期目前半

田代則春弁護士からの最新法改正情報、島原半島を未来につなぐ会（泉川欣一代表）による署名運動などで、島鉄南線存続は可能な条件がそろいつつありました。

しかし、法改正以前の廃線を前提とした既定路線集団は考えを改めませんでした。それどころか妨害さえ仕組んだのでした。

水無川に架かった鉄橋は、鉄道交通復活のためではなく、工事そのものが目的だったことも明らかになりました。

◆変わる議会と変わらない現実

地道な活動の積み重ねが、諫干排水門の開放判決を勝ち取りました。阿久根竹原市長との交流を通じ、早くから注目していた河村たかし氏らの動きもことごとく松坂の指摘してきた地方議会の実態を浮彫りにしました。

議会は市長の追認機関ではなく、『立法の府』であることを「議員定数削減」「旅費条例改正」「水道料改正」「副市長一人」等、議員提案を繰り返して、証明したのが島原市議会議員松坂の二期目の実績でしょうか。

オバマ大統領の誕生、政権交代は、政治が弱い立場の人たちのためのものに変わる予感を私たちに与えてくれました。

その一方で「変わりたくない勢力」の恐るべき巻き返し（検察特捜の国策捜査など）が変わらない現実を印象付けた。有明の水道料金問題も同じ構図です。

◆東日本大震災が突きつけた真実

そして、このたびのとてつもない災害。政治は困っている人を助けるためにある。という当たり前のことを教えてくれました。住民のためという表向きの理由で利権をむさぼりムダを垂れ流してきた政治は大きな転機を迎えていました。

さあ我々はどこに行くのだろうか。